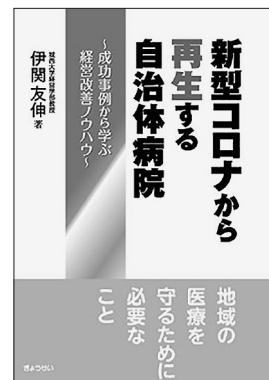


BOOK Review

新型コロナから再生する 自治体病院 成功事例から学ぶ経営改善ノウハウ



評者 二本 立 日本福祉大学名誉教授

日本で最も多く全国の自治体病院を回っている著者の渾身の書き下ろしで、臨場感にあふれ、叙述はフェアで清々しい。これが本書を読んだ感想です。

本書は6章構成です。各章とも時系列的に書かれ、しかも文献・根拠を示した上で、著者自身の判断を明記しています。

第1章「新型コロナウイルス感染症と自治体病院」と第2章「新型コロナに対する国・地方自治体の病床確保政策」は、新型コロナウイルス感染症（以下、コロナ）患者を中心に受け入れた自治体病院の奮闘と国・地方自治体の病床確保策をていねいに述べています。第2章後半の都市部10都道府県の事例分析は貴重です。コロナ患者の治療の先頭に立った「自治体病院への国民の評価は確実に高まった」との著者の評価に同感です。

第3章「総務省の自治体病院政策と新型コロナウイルス」は、新自由主義的考えが強かった「旧公立病院改革ガイドライン」（2007年12月）が自治体病院関係者の強い批判を受けて修正され、「新公立病院改革ガイドライン」（2015年3月）に変わった経緯、およびコロナ蔓延後は総務省の自治体病院政策が前向きになったことを述べています。本章を読んで、小泉・第一次安倍内閣の置き土産でもある「旧ガイドライン」通りに自治体病院の縮小・再編が実施されていたら、自治体病院の多くはコロナに対応できなかったとゾッとしました。

第4章「厚生労働省の進める地域医療構想と新型コロナウイルス」は、コロナ蔓延前の「地域医療構想」では自

治体病院の統合・再編が大きな焦点になっており、その頂点が2019年9月の再検証要請424病院名の実名公表であったことを示すとともに、コロナ蔓延後その見直しが始まっていることを述べています。地域医療を守るために主に都市部の自治体病院の統合・再編や病床削減をする必要があるとのスタンスを明示した上で、病院名公表の問題点を指摘し、「一方的な論理の押しつけはかえって地域医療を壊すことにつながる」と警告し、それに代えて「自治体の手上げ方式」を推奨しているのは説得力があります。

第5章「アフターコロナの時代の自治体病院」は、今後の展望です。第6章「アフターコロナの時代の中小自治体病院再生」は、著者が「市政アドバイザー」として病院の再建・「バージョンアップ」に協力している香川県の三豊市立永康病院の「事例報告」で、著者オリジナルの病院建築や病院再生の方法を詳細に紹介しています。

本書を読んで一番印象に残ったことは、著者の「フェアプレー精神」です。さまざまな施策・担当部門を批判する際も、相手側の事情に常に目配りしており、それが本書の記述の信頼性を増しています。例えば、第4章で厚生労働省による再検証要請病院の実名公表を厳しく批判しつつ、その背景として、「少ない職員数で多くの仕事をしなければならない」同省職員側の事情も指摘しています。第6章では、病院の職員増に抵抗する市人事課の硬直的対応を批判しつつ、人事課の職員配置の余裕のなさも指摘しています。

伊関 友伸 著

A5判／232頁／2021年／定価2,970円（本体2,700円＋税10％）／ISBN978-4-324-11052-2／ぎょうせい刊